
追いかっこ

北川瑞稀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

追いかけてこ

【Nコード】

N7120T

【作者名】

北川瑞稀

【あらすじ】

「聞きたくないの。だから、逃げる。」

——追いかけてこの、スタートだ。

◆サイトからの再掲載です

追いかけてっこ(前書き)

- ・快斗＋蘭（CP要素は多分なし）
 - ・新一死んでます（出てこないけど）。
 - ・組織を壊滅させて、2年くらい経った後の話。だから蘭ちゃんたちが大学生。
 - ・一話ごとの長さがまちまち（長かったり短かったり）。
 - ・細かいところは気にしてはいけません。
- 以上のことを読んで、なお「大丈夫!」と思った方や「なんでもこいや!」と思った方はどうぞ。

追いかけて

夏が過ぎ、日が落ちるのが早くなると、秋がやってくる。

多くの動物が冬眠の準備を始め、忙しく動きまわる。

人間は冬眠はしないけれど、秋や冬になると忙しくなるのは、動物と同じだ。

———そう、もう冬。

新一がいなくなってから三度目の冬が、今年もやってくる。

追いかけて

「蘭ちゃん」

私を呼ぶ声。振り向くと、同級生の女の子が走ってくるのが見えた。

大学生活が始まってから半年以上経った。彼女は、よく一緒に過ごす仲間の一人だ。

「かなちゃん：どうしたの？廊下で全力疾走は危ないよ」
「今日も蘭ちゃんに用って男の子が、校門に来てるんだけど…」
「……………」

その男の子が、誰なのかは知っている。よく知っている。
いなくなる前、自分にそっくりな高校生がいるって、新一が言っていたから。

知っているよ。あなたが、新一からの伝言を伝えようと、いつも私に会いに来ていること。

知っているよ。あなたが、ほんの少しだけでも「これを伝えるのは嫌だ」って思っていること。

だけど会わない。だから会わない。
決して耳を傾けない。聞くのが怖いから。

「…蘭ちゃん、いいの？今日も…」
「いいの。ありがとうね、毎日。」

にこり、と笑う。ちゃんと笑えてるか、自分でもわからない。
彼が校門から去ったということを聞き、少しほっとした。でも彼はしぶといから。まるで怪盗のように、獲物を逃がさない。

知っている。私は、知っている。
だから逃げるの。誰かから。彼から。私から。

——さあ、今日も。
“追いかけて”のスタートだ。

追いかけて（後書き）

かなちゃんⅡ蘭ちゃんの大学の同級生（オリキャラです。ここできかでできません…）。

Re：追いかけて

はあはあと弾む息さえもが鬱陶しい。ただ、今すぐここから逃げ出したかった。

「：蘭ちゃん」

彼そっくりの、テノールの声。間違えちゃ駄目、惑わされちゃだめと思っても、蘭はただただ堕ちていくことしかできない。

呼びかけられているのはわかってる。ちゃんと聞こえてる。誰に呼ばれているのかもわかってる。彼じゃないことを知っている。る。

「————いい加減、逃げるなよ」

真っ直ぐに自分を見つめる視線が痛い。

逃げ出したい。なのに何故か、動けない。捕まえられたわけでもないのに、逃げられない自分が怖くなった。

目を閉じて、呼吸を整える。

そして次に目を開けた時、蘭は自分の言葉を待っているであろう少年に向かって言い放った。

「：逃げているのは、あなたたちでしょう?」

そう言った途端に、少年の顔色がサッと変わるのがわかった。俯

く彼の表情は、悲しい顔。

そこに居るのに耐えきれなくなった蘭は、一目散に駆けていった。さすがに今度は、少年も追ってこなかった。

R e :: R e :: 追いかけて

彼はそこにいた。

いつものように、校門の前で立っていた。
もう二度と、来ないと思っていたのに。

R e :: R e :: 追いかけて

「…なんで、いるの」

もう会っても話しかけない、話しかけられても無視する、と心で誓ったはずなのに、無意識に唇が動いていた。しまった、と思った時にはすでに遅し。慌てて彼の目を見つめるが、感情の色も何もない群青色の瞳からは、何も読むことはできなかった。

彼は柔らかな笑みを浮かべ、だけどそんな顔とは合わない真剣な口調で答えを言う。

「…蘭ちゃんに、伝えなきゃいけないことがあるから」

「……………」

「蘭ちゃん…」

快斗はそのまま次の言葉を続けようとして——思わず蘭は耳を

塞いだ。

嫌だ。

聞きたくない。

前にもそう言ったでしょう、と快斗がそれを言うのを全身で拒んでいる。

仕方なく快斗は、もう一度彼女の名を呼びかける。

「…蘭ちゃん」

耳を塞いで、目を瞑って、外界の情報を遮断している彼女には、この呼びかけが聞こえているかでさえ怪しいけれど、彼は続ける。

「…いつまでも逃げてばかりじゃ、なにも変わらないよ？」

「……………」

「新一は…新一は、もう生きてなんかいないんだ。死んだんだよ…オレのせいで。オレが死なせたんだ。」

「……………」

「なあ、蘭ちゃん。本当は聞いてるんだろ？」

それだけ言って、彼は彼女の返答を待つ。が、いくら待っても、何も返ってこない。

何十分が経った後、彼は「また来るから」と一言残し、寂しげにその場を去って言った。

残された蘭は、いつまでもいつまでも、耳を塞いで立っていた。

R e :: R e :: R e :: 追いかけて

耳を塞ぐ。

「蘭ちゃん」

あの人の言葉を拒絶して、前を見ない。
そんなことを、繰り返し繰り返し。
ねえ…もう、いいよね？

R e :: R e :: R e :: 追いかけて

いつものように彼は居た。

彼はどこから調べたのか知らないが、蘭の帰る時間ぴったりに、
正門前で待ち伏せしている。

鬱陶しい、と思っていた彼のことが、いつしか“いないと心配する”
存在になっていたのはいつからか。

あの頃からか。それともあの頃からか。———それとも、最初からか。

「…快斗くん」

「よ、蘭ちゃん。…話、聴く気になった？」

快斗のその問いに、蘭は瞳を伏せ、何かを考えていたが、しばらくして小さく首を振った。彼女のトレードマークである黒くて長い髪が左右に揺れる。

快斗はそっか、と呟くと、それ以上は追求してこなかった。

二人の間を沈黙が覆う。

その沈黙が少し気まずくて、蘭はその場から立ち去ろうと足を踏み出した。と、そんな彼女を快斗が呼び止める。

「――蘭ちゃん」

“彼” そっくりの甘いテノールの声。思わず立ち止まりそうになったが、必死に堪えて歩き続ける。

そんな彼女を快斗の声が追いかける。

「蘭ちゃんは、悪くないからな！ 悪いのは、オレらだから。…だから、…新一のことは忘れろ！ 忘れて幸せになれ！」

“忘れて幸せに”？

その言葉に反応したかのように、蘭の歩みが止まった。

そんな蘭を気にしているのかいないのか、快斗は続ける。

「蘭ちゃんが幸せになることを、きっと新一も願ってるよ」

その言葉に、蘭の中で何かが切れた。

先程歩いた道を引き返し、快斗の元へ戻る。カツカツと早足な足音が響く。

快斗の目の前に着くと、蘭は快斗を見上げ、叫んだ。

「そんなこと、できるわけじゃない！」

快斗は驚きで瞳を見開いた。群青色の瞳が、蘭の瞳に綺麗に映る。蘭は慌てて視線を逸らし、視界から群青色を排除する。

「ら…んちゃん…?」

「…っ」

蘭は快斗の呼びかけには答えない。答えられない。

今、自分が何を言ってしまったのか。言わないと決めていた、弱みではなかったか。蘭の頭の中ではそれだけが渦巻いていて、他のことは考えられなかったのだ。

快斗は、「参ったなあ」とでも言うように頬を掻き、宙を見つめた。空には白い雲だけがぶかぶかと脳天氣に浮かんでいて、快斗のこの状況を解決する策には何の参考にもならなかった。

けれども、快斗は口元に笑みを浮かべていた。そんなものがなかったって、最初からその答えはわかっていたのだ。

快斗は笑みが浮かんだ自分の顔を、真面目な顔に戻し、蘭に深くと頭を下げた。

謝罪の一言だけを言って。

「ごめん!」

「……………いいよ、もう」

しばらくの沈黙の後出てきた言葉にびっくりして快斗が顔を上げると、蘭は微笑を浮かべていた。

「いいの。もう」

「え…でも…」

「いいよ。私のほうこそ、今までごめんなさい」

「…え?」

突然謝られて、快斗は更に驚いた。

謝るべきは自分なのに、どうして…。いつものポーカーフェイスはどこへやら、快斗は驚きを隠せなかった。

「ずっと話を聞かないでごめんなさい。快斗くんが新一や私に償いたいってことはわかったのに、聞かないでいてごめんなさい。」

「蘭ちゃん…」

「私、快斗くんが話なんてしなくても、全部知ってる。本人に…聞いたから。死ぬ前に、聞いたから」

「え…新一が？」

「うん。…新一、言ってたよ。快斗くんは悪くない。哀ちゃんも悪くない。悪いのは、他でもない自分だって。」

「…それは、違…」

「違わないよ。悪いのは絶対、推理オタクだった新一よ。アイツが、失敗しただけ」

蘭は淡々と話を続ける。

快斗に余計な口を挟む隙も与えないのは、流石探偵の娘だなと感心してしまった。

「快斗くんは、新一にそっくりよね。外見も、中身も。それこそ双子みたいに」

「オレは違うよ。オレは新一みたいには…」

「ううん、そっくりだよ。心っていうか…うん、心が。」

「心…？」

「そう、基盤…かな。行動する理由がそっくりなの。いつも、誰かの為にとって。」

「そんなことないよ」

「あるよ。短い付き合いだったけど、わかるもん。絶対そうだって」

「…そう？」

「そうだよ。だって、私が新一を忘れないための楔だったんだもん」
「…え？　は？　楔？」

蘭は快斗の問いには答えず、にこっと笑いながら一歩だけ後ろに下がった。そしてそのままぐるりと回り、快斗に背を向ける。

蘭は言った。

「私の負けね」

振り向いてしまった。打ち明けてしまった。だから、負け。

例えそれが、彼女が必ずやらなくてはならないことだったとしても、負けは負け。

負けなくてはいけない勝負でも、負けということに変わりはない。彼女は、自分の中の“何か”に負けたのだ。

いや、寧ろ勝ったと言うべきかもしれない。彼女がこんなに清々しく笑うのは、久しぶりだから。

そんな彼女の心の中の葛藤なんて知る由もない快斗は、ぽかんと口を開けて、蘭の背中を見つめている。

「…それってどういう意味？」

「ん？　…秘密、よ。」

彼女は一度だけ快斗を振り向いたが、すぐ彼を残して走り去ってしまった。

彼女の言葉や行動が、何が何だかよくわからない快斗は、しばらくその場で放心していたが、まあいいか、と溜め息をついた。自分は探偵じゃないんだから、謎を解く必要もないだろう、と。

ただ、最後に見えた蘭の表情が、よく新一の浮かべていたような不適な笑みだったのが、何故か頭に残っていた。

R e :: R e :: R e :: 追いかけて (後書き)

結局何が書きたいんだろうかという感じが否めないまま終わってしまいました。

でも、書いてるときは楽しかったです。

ご清読ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7120t/>

追いかけてこ

2011年10月6日08時10分発行